魅どころチェック

カセット人気「巻き戻し」

音質に新鮮味 若者とりこに

カセットテープの人気が復活している。レコード店やCDショップで専用のコーナーが定着し出した。インターネットの音楽配信とは違った温かみや音の揺らぎが、むしろ新鮮。若者から高齢者までニーズがあり、人気の「巻き戻し」が鮮明だ。

音楽カセットテープを製造する東京電化（東京・豊島）にインディーズ（独立系）のバンドから注文が急増している。現在は1カ月に2～3タイトルは生産し、1タイトルあたり300～500本を作る。「カセットならではの柔らかく心地よい音が若者に見直されている」と入江伸彦社長はにこやかだ。

同社はジョン・レノンの「イマジン」が流行した1971年にテープ製造を始めた。洋楽の影響を受けつつ、80年代に松田聖子や小泉今日子が活躍してJ-POPの基礎ができた。90年代前半までの邦楽市場の成長は追い風となったが、CDの台頭と2000年代のネット配信によってカセットを知らない世代が増えた。日本レコード協会によると、最近10年で国内カセット生産は7分の1に縮んでいた。

タワーレコード渋谷店（東京・渋谷）は1年前からカセット専用コーナーを設けた。1本1500～2000円台が多い。インディーズ系ロックのほか、ニルヴァーナのような往年のバンドも扱う。倉庫に眠っていた掘り出し物もありYMOのベスト盤は約100本がすぐ売り切れた。

売り場をつくったのは同店店員の武田晃さん。いま28歳で、中学生の頃にはMDが録音媒体だった。それでも音楽業界では大手からデビューする前のバンドがカセットで売ることが多い。粗削りのギターやボーカルの迫力は、テープのほうが生々しく伝わる。米国・西海岸で発売が増えたのをきっかけに「うちもカセットで若手バンドを応援したい」と会社にかけあった。

東京電化は埼玉県東松山市の工場で音楽テープを作っている。演歌が主力になっていたところにインディーズ系ロックが割り込んだのは、低コストに若手が着目した面もある。片面15分のカセットを100本注文しても、最低4万円程度。YouTube（ユーチューブ）での動画配信だけでなく、手に取れる作品となることも魅力だ。秋葉原系アイドル「でんぱ組・inc」も14年にカセットで楽曲を販売しジャンルは広がりそうだ。

中身が空のカセットだと、国内で唯一の自社ブランドを続けるのが日立マクセルだ。月に100万本ほど出荷し、売り上げはここ1年まったく落ちていないという。けん引役は高齢者のカラオケ需要だ。売り上げの半分は10分テープが占める。

同社には毎日のように「カセット生産を続けてほしい」との声が集まる。韓国製の磁気テープをインドネシアの提携工場で組み立てている。執行役員の乗松幸示氏は「社会的な要望があればなるべく生産を続けたい」と語る。

79年にテレビの台頭を皮肉った「ラジオ・スターの悲劇」という曲が英国で流行した。40年近くたった現在、ネットで音楽の聞き放題サービスすらあるが、ラジオは根強いファンを抱える。カセットもローテクならではの音質と手作り感が若手を取り込んでいけるか。スマホに慣れた学生が、のびたテープを鉛筆で巻き取る姿はどこかほほ笑ましい。

（福島悠太、小太刀久雄）

店頭に並ぶカセットテープ（東京都渋谷区のタワーレコード渋谷店）

音楽カセットを販売する主な店

タワーレコード渋谷店（東京・渋谷）	インディーズ系が豊富、米ロック大御所や掘り出し物も
HMVレコードショップ（東京・渋谷）	カセットのタイトルのほか、期間によってラジカセも販売
ビームスレコーズ（東京・渋谷の店舗、ネット販売）	米国・西海岸のアーティスト作品を中心に取り扱い